

## サミット議長をつとめる

# トルドー首相の横顔

トルドー氏は、国際舞台において今や最も経験豊富な政治家の一人となっている。

彼は、カナダが西側先進工業諸国と新興旧植民地諸国との間の“正直な仲介者”としての評判を得た前任者レスター・ピアソン首相の、いわば遺産を引きつ

いだ。そして、世界は相互依存の時代にあり、また第三世界の生活状況を改善すれば世界全体の安定化につながるという認識で、彼はあえてこの仲介者の立ち場を踏襲することにした。

トルドー氏はまた、首相に初めて就任してまもなく、その他の国際問題でも強いリーダーシップを発揮した。中華人民共和国（中国）を承認し、対ソ関係を改



トルドー首相

善し、また公害防止のためカナダの主権を北極海にまで延長したのも彼である。一九七一年に、シンガポールで開かれた

（英）連邦会議では、同組織の分裂を防いだ。

トルドー氏は、首相就任当初から、カナダに対する世界各国の理解を高め、同時に国際問題に対するカナダ国民の認識を深めるため、広く世界各国を訪れた。

就任直後、トルドー氏は、西部カナダにおける集会以次のように述べている——「カナダに対する最大の脅威は外国投資や外国のイデオロギ―、あるいは外国の武器ではない。むしろ人間らしい生活を求めながら、取り残されていく一方の、世界の人口の三分の二を占める人々こそ、われわれの脅威の源である。」

トルドー首相はまた、カナダの村米依存度を弱めるため、ヨーロッパや環太平洋諸国との関係強化に努めた。首相になつてもなく、ニュージーランド、オーストラリア、アジア、シンガポール、日本の太平洋諸国を訪れたことに、トルドー氏の政策がうかがえる。欧州経済共同体（EEC）に対しては、トルドー氏は契約的連結を求め、それに成功した。ただし、この連結は彼が望んだ貿易関係の増大という成果をまだ上げていない。

一九七六年には、カナダの政治的指導者たちがそれまでほとんど無視してきたラテン・アメリカに対するカナダの関心

を確認するため、同地域を訪れている。

最近のトルドー首相は、先進工業諸国と発展途上諸国との間の関係改善に力を入れている。今年一月には、南北サミットへの支持を取りつけ南北問題への取り組みを協議するため、ナイジェリア、セネガル、アラビア、メキシコを訪れたし、五月には同様の目的でアルジェリアを訪問している。

トルドー首相の下で、カナダは主要先進国七か国の首脳によるサミット会議に、一九七六年のサンファン会議（アエルトリコ）以来参加している。このサミットで、トルドー首相は他の首脳に型通りの演説をとり止めて、形式ばらない意見交換をするよう説得して、たちまち彼の存在を印象つけた。形式にこだわらな

い意見交換というのは、（英）連邦会議など他の会議でも彼が提唱し、大きな成果をおさめたやり方である。



トルドー首相と共にオタワ・サミットでカナダ政府を代表するジャック・パリゾ（右）とジャック・パリゾ（左）

国内におけるトルドー氏の最大の関心事は国家統一の問題である。一九六八年にトルドー内閣が誕生して間もなく、連邦議会は連邦政府の業務を公式に三言語化する公用語法案を承認した。これにより連邦政府の公務員にフランス系職員が増えることが約束された。トルドー氏は、かつてある記者に、政治における彼の執念は「ケベックが分離主義によってカナダを離脱していかないようにし、またカナダが狭量な気持からケベックを追い出さないようにする」と語っている。

トルドー氏の十二年間の首相在任中、全カナダ国民——いや世界中の人々——にとつて、エネルギーの供給と価格問題

が大きな懸念となった。そこで一九七五年、トルドー政府は国有石油会社ペトロ・カナダを創設した。またカナダの産業界が国際市場で競合できるよう、石油と天然ガスの国内価格を世界水準より低く押さえた。カナダ住宅断熱計画や代替燃料への転換に対する資金援助などを通じ、省エネルギーにも大きな努力が払われた。トルドー政府はまた、北極から天然ガス、パイプラインを敷くため、北方パイプライン局を設立した。

一九七九年三月の総選挙でトルドー氏の長期政権は少差で敗退し、保守党の少数派内閣が誕生した。しかし、保守党政

府はまもなく不信任投票によって政権の座を追われ、一九八〇年二月十八日の総選挙でトルドー内閣が復活した。